

## 鹿児島県の複式学級を有する小学校の体育科カリキュラムについての報告

—実態調査を基にした授業づくりの方向性を探る—

阿部 大 亮 [鹿児島大学教育学部附属小学校]・當房 省 吾 [鹿児島大学教育学部附属小学校]  
廣瀬 勝 弘 [鹿児島大学教育学系(保健体育)]

### A report of problems with the physical education curriculum with composite classes in Kagoshima prefecture

ABE Daisuke・TOUBOU Shogo・HIROSE Katsuhiko

キーワード：複式学級の特徴、体育科カリキュラム、体育科の授業づくり、指導内容の明確化、教材解釈

#### 1 問題の所在

近年、少子化や過疎化が進行する人口減少社会を迎える中で、現行の学校規模を維持することが困難な学校が増加することが見込まれている。鹿児島県は、多くの離島・へき地を抱えており、小学校526校のうち、その半数近くの243校が複式学級を有する小学校である(平成28年度)。このような複式学級を有する学校においては、学習指導を行う上で「2学年が一緒に学ぶこと」「少人数であること」などの特性を有する。

これらの一般的な特性を、体育科の授業と関連付けて捉えると「異学年のめあてが異なる教材の進め方」「少人数によるゲーム領域の指導の在り方」「体力差・体格差からくる序列意識が生じ、競争心の高揚や運動への動機付けの難しさ」などの課題が見えてくる。教師は、これらの課題を解決するために、カリキュラム編成や教材設定、単元構成及び単位時間の指導方法の工夫を行いながら、子どもたちに指導内容を身に付けさせるための授業改善に取り組む現状がある。

しかしながら、体育科カリキュラムに焦点を当てると、いくつかの課題が散見される。例えば、3・4年の複式学級のカリキュラムを「A年度・B年度方式」で行っている学校では、3年生が4年生内容から授業を受けることや、4年生が3年生の内容を受けることが発生し、指導内容を系統的に学ぶことができない現状が存在する。また、「1本案」の学校では、同単元・同内容を2学年繰り返すだけで、子どもたちにとっては、課題意識を高めながら、意欲的に学習に取り組むことが難しい現状が見られる。さらに、極小規模の学校では、全校児童が少なく、1～4年生が共に、体格差・体力差が大きい中で体育科の学習を行っている。このように、複式学級を有する学校は、学年差・少人数という特性がある中で、どのようなカリキュラム編成をして、6年間の学びを連続させていくのかということが大きな課題であると言えよう。

本論では、鹿児島県の複式学級を有する学校の体育科カリキュラムについての現状把握のためのアンケート調査を行い、複式学級を有する学校の体育科カリキュラム編成の実践的課題の抽出とその改善の方向性を探ることを主たる目的とする。加えて、当該目的を踏まえた複式学級の体育科カリキュラム編成のための教材解釈の視点と、指導計画案作成についての典型的事例についての報告を行うこととする。

## 2 調査方法

アンケート調査は、平成28年度に全学級が複式学級（完全複式）となっている鹿児島県内の小学校100校を抽出、対象として行った（対象校は鹿児島県内7教育事務所毎に均等抽出）。調査期間は、2018年7月31日～8月25日であった。調査方法は、対象校100校に郵送によりアンケート用紙を配布し、各学校の体育主任が回答の後、返送頂いた。回答数は、66校であった（回収率66%）。

## 3 アンケート調査の結果・考察

### 3.1 体育の授業形態

まず、回答のあった66校の授業形態について、確認することとする。

表1は、回答のあった66校の体育の授業形態の分類である（表2・表3は、完全複式学級・変則複式学級別の内訳一覧）。約半数の学校が、通常の体育授業では、各複式学級で授業を実施している現状が明らかになった。特徴的な事柄は、その他の半数の学校では、領域や学年によって、合同で体育授業を実施していたことである。各学校は、「人数が少ない」という前提（制約）を事前に捉え、年間計画作成段階から、校内で調整を進めている学校が多く存在した。

### 3.2 体育の年間指導計画

本項では、複式学級を有する学校における、体育の年間指導計画について、確認することとする。

表4は、回答のあった66校の体育の年間指導計画の分類である（表5・表6は、完全複式学級・変則複式学級別の内訳一覧）。実に86%（57校/66校）の学校が、「A年度B年度方式」を採用していた。単式化しながら、子どもたちに多くの領域を経験させていく上で、「A年度B年度方式」を採用している学校が多いと推察される。また、

表1 複式学級の体育の授業形態

【授業形態】	学校数(66)
各学級	32
領域によっては合同	19
合同	13
学年によっては合同	2

表2 完全複式学級の体育の授業形態

【授業形態】	学校数(43)
各学級	23
領域によって合同	13
合同	6
学年によって合同	1

表3 変則複式学級の体育の授業形態

【授業形態】	学校数(23)
各学級	9
合同	7
領域によっては合同	6
学年によっては合同	1

表4 複式学級の年間指導計画

【年間計画】	学校数(66)
A・B年度	57
1本案	6
学年別	2
折衷案	1

表5 完全複式学級の年間指導計画

【年間計画】	学校数(43)
A・B年度	40
1本案	2
折衷案	1

表6 変則複式学級の年間指導計画

【年間計画】	学校数(23)
A・B年度	17
1本案	4
学年別	2

教科書会社等が提示する指導書に含まれる指導計画事例や、副読本等も同様に学年別に作成されていることも、採用理由として考えられる。小学校学習指導要領解説体育科では、低・中・高学年、2 学年毎に、学習内容が例示を含め記載されていることは周知の通りである。「A 年度 B 年度方式」採用のためには、学習指導要領解説に含まれる学習内容を精緻に分析し、学年毎に、習得すべき内容を精確に位置づけることが、その前提となる。このことは、少なくとも現状としては、複式学級の体育の授業づくりを行う教師にとって、系統的に学習を進めるべく内容構成の検討を難しくしている大きな理由でもありと言えよう。

### 3. 3 体育の指導体制

本項では、複式学級を有する学校における、体育の指導体制について、確認することとする。

表 7 は、回答のあった 66 校の体育の指導体制の分類である（表 8・表 9 は、完全複式学級・変則複式学級別の内訳一覧）。85%（56 校/66 校）の学校が、担任が体育の授業を担当していた。管理職を含み、ティームティーチング(TT)を活用するなど、指導方法の工夫を行っている学校は 15%（10 校/66 校）であった。複式学級は、早生まれを考慮するならばクラスにおいて最大 4 年近くの学年差が生じることとなり、教師らは、想像以上に「子どもたちの（実態の幅）」に苦慮するものと考えられる。TT を含む複式指導における指導方法の充実には、大きな検討課題の 1 つと言えよう。

### 3. 4 複式学級における体育学習を実践する際の利点

本項では、複式学級で体育学習を実践する際の利点について、確認することとする。

表 10 は、回答のあった 66 校による、複式学級における体育指導を行う際の利点一覧である（複数回答可）。「上学年がお手本になる」「個に応じた指導の充実」などは、半数以上の学校が、異学年で学ぶ利点として取り上げている。つまり、少人数故に、きめ細やかな実態把握、個に応じた指導の充実が図られると捉えているといえよう。

### 3. 5 複式学級で体育学習を実践する際の課題とその解決策

本項では、複式学級で体育学習を行う上での課題とその解決策について、確認することとする。

表 11 は、回答のあった 66 校による、複式学級における体育指導を実践する際の課題一覧である。「人数が少ない（46 校/66 校）」「技能差・体格差が大きい（13 校/66 校）」ことが、指導をする上での大きな課題であると捉え

表 7 複式学級の指導体制

【指導体制】	学校数(66)
担任	56
管理職とのTT	5
支援員とのTT	3
体育専科	1
中学校教諭とのTT	1

表 8 完全複式学級の指導体制

【指導体制】	学校数(43)
担任	35
支援員とTT	3
管理職とTT	3
体育専科	1
中学校教諭とTT	1

表 9 変則複式学級の指導体制

【指導体制】	学校数(23)
担任	21
管理職とTT	2

ている教師が数多く存在した。「各学年の指導内容の明確化」「年間指導計画作成」など、授業づくりの根幹部分である内容の精選とその実施立案について実践上の課題として捉えていることは、複式の体育授業を構成すること、言い換えるならば、カリキュラムを編成する力量が教師に不可欠であることを意味していると言えよう。一方、表12は、上記課題の解決策と考えた内容一覧である。人数が少ないことを、「教材・ルールや場の工夫」「交流学习・合同学習の実施」など、教材解釈を丁寧に取り組み、指導方法論上の工夫で当該課題の解決に臨む教師の姿が見てとれると言えよう。

表10 教師が捉える複式学級における体育学習を実践する際の利点

【指導する際の利点】	学校数(複数回答可)
上学年がお手本になったり、教えてくれたりする。	33
個に応じた指導の充実が図れる。	31
下学年が上学年をお手本にできる。	25
運動量が確保できる。	13
教え合い・学び合いが行いやすい。	9
下学年が次年度の見通しをもてる。	6
目標を広く捉えて指導できる。	4
実態が把握しやすい。	3
場が容易に作れる。	2
ルールを工夫する必要がある。	2
安全面の確保がしやすい。	2

表11 複式学級における体育学習を実践する際の課題

【課題】	学校数(複数回答可)
人数が少ない。	46
技能差・体格差が大きい。	13
各学年の指導内容の明確化を図ること。	12
磨き合い・高め合う活動が深まらない。	10
年間指導計画を作成すること。	10
競争する心が育たない。	5
示範をすることができない領域がある。	4
転学児童の未履修が不安である。	2
教具や施設に課題がある。	2

表12 体育学習を実践する際の課題に対する解決策

【解決策】	学校数(複数回答可)
教材・ルールや場の工夫	34
交流学习・合同学習の実施	31
指導体制の整備	14
ICT活用	13
2学年分の指導内容や評価規準の作成	5
保護者の協力	2
細やかな実態把握	2

表 13 体育学習を実践する際に指導が難しい領域

【領域】	学校数(複数回答可)
ゲーム・ボール運動	34
器械運動	5
水泳	3
表現運動	1
集団行動	1

表 14 体育学習を実践する際に指導が難しい領域の理由

【理由】	学校数(複数回答可)
人数が少ない	29
技能差・体格差が大きい	13
個人差が大きい	5
示範ができる子どもがいない	2
T.T.が必要	2
個人差が大きい	2
話し合いが活性化しない	1
チームワークのよさを味わえない	1

### 3. 6 複式学級で体育学習を実践する際に指導が難しい領域とその理由

本項では、複式学級で体育学習を行う際に指導が難しい領域とその理由について、確認することとする。

表 13 は、回答のあった 66 校による、体育指導を実践する際に指導をすることが難しいと考えている領域一覧である。他の領域に比して、「ゲーム・ボール運動領域」の指導が困難であるとの回答が、圧倒的に多くみられた(34校/66校)。表 14 は、体育指導を実践する際に指導をすることが難しいと考えている領域の理由一覧であるが、「人数が少ない」ということが、第 1 の理由にあげられていた(29校/66校)。

この理由を詳細に検討すると、「人数が少ない」という記述の中に並置するかたちで、「〈正規〉の人数でゲームができない」などの表記が複数散見された(7校/29校)。この表記は、現場の教師らはゲームを行う際に、取り扱う当該種目の〈正規のルール〉に従うことが学習すべき最優先課題であると捉えているのではないかと、ということの意味していると言えよう。周知の通り、ボールゲーム系の領域では、現行の学習指導要領には「〇〇型」という表記がされ、その「〇〇型ゲームの中に含まれる動き」を学習するために、例示として「種目」が提示されている。しかしながら、多くの現場の教師らは、「種目」を学習することが、目指されるボールゲーム系領域の学習の「本丸」であると、強く考えているのではないかと推察される。

複式学級を担当する教師らにとって、とりわけ困難であると捉えるボールゲーム系領域の指導及びその計画立案について詳細な検討を加えることは、避けることのできない重要な今後の課題として位置づけることができる。次章以降では、ボールゲーム系領域を対象として、複式学級を対象とする体育科カリキュラムづくりに向けた方向性の基本的な考え方とその効果的な実践に向けた計画立案事例の提示を行いたい。

## 4 複式学級の体育科カリキュラムづくりに向けた方向性

### 4. 1 体育科カリキュラムづくりに向けた方向性の基本的な考え方

本アンケート調査から、複式学級を有する学校の体育科学習においては、ボールゲーム系領域に実践上の課題が存在することが明らかとなった。ボールゲーム系領域を課題とした理由として、以下の内容が挙げられていた。

- 「A年度・B年度方式」で行っている学校では、上学年内容と下学年内容が交互に行う為、上学年が下学年の内容を行う際や下学年が上学年の内容を行う際に、指導内容が発達の段階に合致しない。
- 「1 本案」の学校でも、単元・同内容を 2 学年繰り返すだけで、子どもたちにとっては、課題意識を高めながら、意欲的に学習に取り組むことが難しい。
- 少人数であることや技能差・体格差は大きく、正式なルールやコートで学習を行うことが難しい。

上記課題として教師がとりあげた理由を検討すると、以下の2つの改善すべき項目を抽出することができよう。

- |                       |
|-----------------------|
| ○ 各学年の指導内容の明確化        |
| ○ 指導内容を身に付けさせる運動教材の設定 |

次項では、複式学級を対象とした「指導内容の明確化」について、具体的な事例を提示しながら解説したい。

#### 4.2 各学年の指導内容の明確化について

一般的に複式学級を有する学校のカリキュラムは、「A年度・B年度方式」や「1本案方式」が採用されている。「A年度・B年度方式」では、上学年が下学年の内容を行ったり、下学年が上学年の内容を行ったりする。つまり、通常の学習内容と学習するべき年齢が、必ずしも一致しないことが発生する（学習の順序が入れ替わる）。

A年度(4年生内容:ハンドボール) 3年生時	B年度(3年生内容:タグラグビー) 4年生時
指導する内容が難しく、発達の段階に合っておらず、技能が追いつかないことがある。	指導する内容が簡単で、発達の段階に合っておらず、技能の高まりが見られないことがある。

一方、「1本案」の方式では、「同単元・同内容」を2学年繰り返すことになる。そこには、教師の教材解釈をうる確かな目と取り組みが見られなければ、全く同じ学習を2年間繰り返すことになるという課題が存在する。

1年目 3年生時	2年目(繰り返し) 4年生時
運動と初めて出会い、意欲的に学習に取り組むことができる。	学習の見通しはあるが、運動との出会いに新鮮感がなく、同じ学習を繰り返すだけで学習の意欲が高まらないことがある。

このような課題を解決するには、各学年の指導内容を明確にすることが大切であると考えられる。現行の小学校学習指導要領解説体育編では、指導内容の明確化が改訂の要点として挙げられた上で、指導内容が2学年で示されている。これらを、系統的に6年間を見通して習得させていくことが大切である。そのためには、「どの学年で」「どの内容を」指導するのかを明確にすることが必要になってくる。

複式学級を有する学校における「A年度・B年度方式」や「1本案方式」の課題を前述したが、これらの課題は、各学年の指導内容を明確にすることで解決できると考える。運動教材の設定と関連してくるが、中学年のゴール型ゲームを例に考えると、「A年度・B年度方式」の学校においては、仮に「A年度」で「タグラグビー」、「B年度」で「ハンドボール」を取り上げる運動教材として設定したときに、依然、種目を学習する考え方が強く、「タグラグビーを教える」「ハンドボールを教える」ということになり、種目固有の技能を身に付けさせようとするあまり、授業では、3年生で「ハンドボール」のパス・ドリブル・シュートは困難であるということに陥りがちである。

また、「1本案方式」の学校においては、仮に1年次に「ハンドボール」、2年次も「ハンドボール」という運動教材の設定となった際に、「ハンドボール」を2年続けて学習することになり、指導内容に変化がなく、技能の高まりが見られないということに陥りがちである。そこで、「3年生で指導する内容」と「4年生で指導する内容」を明確に分離することで「A年度・B年度方式」や「1本案方式」の課題を解決できると考える。

「A年度・B年度方式」の学校で、指導内容を明確にして、仮に「A年度」で「タグラグビー」、「B年度」で「ハンドボール」を取り上げる運動教材として設定したときには、以下のように、各運動教材で指導内容を身に付けていくことになる。

A年度(ハンドボール)		B年度(タグラグビー)	
3年生	4年生	3年生	4年生
明確化した3年生の指導内容を身に付ける。	明確化した4年生の指導内容を身に付ける。	明確化した3年生の指導内容を身に付ける。	明確化した4年生の指導内容を身に付ける。

つまり、運動種目を教えるのではなく、運動教材を通して、指導内容を身に付けるという考え方に立脚したなら

ば、「A年度」の3年生は、「ハンドボールで3年生の指導内容」を学び、「B年度」は4年生となり、「タグラグビーで4年生の指導内容」を学ぶことになる。このことで、当該学年の指導内容を、(教材を通して学ぶ)ことができるようになるため、前述の課題を解決することになると考えられる。

「1本案方式」の学校では、指導内容を明確にして、仮に、1年次に「ハンドボール」、2年次に「ハンドボール」を取り上げる運動教材として設定したときには、以下のように各運動教材で指導内容を身に付けていくことになる。

1年次(ハンドボール)		2年次(ハンドボール)	
3年生	4年生	3年生	4年生
明確化した3年生の指導内容を身に付ける。	明確化した4年生の指導内容を身に付ける。	明確化した3年生の指導内容を身に付ける。	明確化した4年生の指導内容を身に付ける。

2年間共に、同じハンドボールを運動教材として設定しても、指導内容が明確であれば、3年生のときは、3年生の指導内容をハンドボールで身に付け、4年生のときは、4年生の指導内容をハンドボールで身に付けることになる。このことで、2年間同じ運動教材を設定しても当該学年の指導内容を、(教材を通して学ぶ)ことができるようになるため、前述の課題を解決することになると考える。

以下は、現行の小学校学習指導要領解説体育編で例示されているボールゲーム系領域「ゴール型」の各学年の指導内容の例を一覧にまとめたものである。

	1年	2年
技能	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ねらったところに緩やかにボールを投げたり、転がしたりすること。</li> <li>○ ボールが飛んだり、転がったりして行くコースに入ること。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ボールを捕ったり止めたりすること。</li> <li>○ ボールを操作できる位置に動くこと。</li> </ul>
思考判断	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ボールゲームの行い方を知り、楽しくゲームができる場や得点の方法などの規則を選ぶこと。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ボールゲームの動き方を知り、攻め方を見付けること。</li> </ul>
態度	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ボールゲームに進んで取り組むことができる。</li> <li>○ 運動の順番やまきまりを守り、友達と仲良くゲームをすることができる。</li> <li>○ 用具の準備や片づけを、友達と一緒にすることができる。</li> <li>○ 危険物が無い、ゲームをする場が十分なかなどの場の安全に気を付けることができる。</li> </ul>	
	3年	4年
技能	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 空いている場所に動く。</li> <li>○ ボールを持ったときにゴールに体を向ける。</li> <li>○ 味方にボールを手渡したり、パスを出したりする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 空いている場所に素早く動く。</li> <li>○ 向かってくるボールが邪魔する位置に移動する。</li> <li>○ ボール保持者と自分の間に守備者がいないよう位置に移動する。</li> </ul>
思考判断	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ゴール型ゲームの行い方を知る。</li> <li>○ ゲームや練習をする時の規則などを選ぶ。</li> <li>○ ゴール型ゲームの特徴に合った攻め方を知る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ゲームや練習をする時の規則などを選ぶ。</li> <li>○ ゴール型ゲームの特徴に合った攻め方の簡単な作戦を立てることができる。</li> </ul>
態度	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ゴール型ゲームの学習に進んで取り組むことができる。</li> <li>○ 用具の準備や片づけを、友達と一緒にする。</li> <li>○ 運動の順番やまきまりを守り、友達と仲良くゲームする。</li> <li>○ 危険物が無い、ゲームをする場が十分なかなどの場の安全に気を付ける。</li> </ul>	
	5年	6年
技能	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 近くにいるフリーの味方にパスを出すことができる。</li> <li>○ ボール保持者からボールを受けることのできる場所に動くことができる。</li> <li>○ パスを受けてシュートなどを行うことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 相手がとられない位置でドリブルすることができる。</li> <li>○ ボール保持者とゴールの間に体を入れて相手の得点を防ぐことができる。</li> </ul>
思考判断	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ゴール型の楽しいゲームの行い方を知っている。</li> <li>○ プレーヤーの数、コート広さ、プレー上の制限、得点の仕方などのルールを選ぶことができる。</li> <li>○ 効果的な攻め方を知り、チームに合った攻め方を選ぶことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ チームの特徴に応じた攻め方を知り、自分のチームの特徴に応じた作戦を立てることができる。</li> </ul>
態度	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ゴール型ゲームに進んで取り組むことができる。</li> <li>○ ルールやマナーを守り、友達と助け合って練習やゲームをすることができる。</li> <li>○ 用具の準備や片づけで、分担された役割を果たすことができる。</li> <li>○ 場の危険物を取り除いたり場を整備したりするとともに、用具の安全に気を配ることができる。</li> </ul>	

このように指導内容を明確にし、重点を精確に示すことで、発達の段階に応じて指導内容をバランス良く身に付けていくことにつながると考える。次項では、この「明確化した指導内容」をどのような運動教材を設定して身に付けさせていくのかについての基本的な考え方について述べることにする。

#### 4.3 指導内容を身に付けさせる運動教材の設定の基本的な考え方

まず、前述の「指導内容の明確化」を受け、その指導内容を身に付けさせる運動教材設定の重要性について述べたい。現行の小学校学習指導要領解説体育編では、ボールゲーム系領域においては、技能における指導内容や取り上げる運動教材の例示が「ゴール型」「ネット型」「ベースボール型」で示されている。これらの分類について高橋(2010)は、「限定的なボールゲームの種目中心の考え方から、学習内容の共通性が高いボールゲーム群から選択して運動種目を選択して学習させるべきで」と述べている。さらに高橋(2010)は、「これらの各型に属するゲームは、共通性が高く、学習した能力が他の種目に転移するという考え方に立っています」と述べている。これらのことから、運動種目固有の技能を教えるのではなく、型に共通する技能を系統的に身に付けさせていくことが重要であるといえよう。つまり、このことは、「バスケットボール〈を〉教えていた体育授業」から「バスケットボール〈で〉教える体育科授業」への考え方の転換を意味しているものである。

このような考え方を基に、複式学級を有する学校の体育科授業を考えると、「少人数であることや、技能差・体格差が大きいことから、正式なルールやコートで学習を行うことが難しい」という課題が、前述の通り、本アンケート調査においてもあがっていた。その解決策として、交流学习や合同学習、集合学習を取り入れながら体育科の授業を展開されていた。このような形態を取り入れながら体育科の学習を行うことは、とても重要である。しかしながら、最も重要なことは、正規なルールやコートで学習を行うという種目中心の考え方から脱却し、自ら運動教材を工夫し、設定するという指向である。以下では、指導内容を身に付けることができ、自分の学級・学校の児童の実態を鑑み、どのように運動教材を設定するのか、についての考え方を詳述する。

岩田(2012)は、「内容的な視点と方法的な視点を基にスポーツや遊びである素材を加工・改変したものを教材」と述べている。図1は、教材づくりの基本的な視点である(図1)。運動教材を設定するには、数多あるスポーツや遊びなどの素材を選ぶ。そして、大きく2つの視点で加工・改変することが重要である。1つ目は、指導内容を身に付けることができるかといった「内容的な視点」である。指導内容を確実に身に付けることができるのかという視点である。2つ目は、子どもの学習意欲を高めることができるかといった「方法的な視点」である。具体的には、児童の興味・関心、発達の段階などの実態や学習機会の平等性、プレイの面白さがあるかなどの視点である。この2つの視点を基に素材を加工・改変することで、よりよい運動教材が設定することにつながる。

例えば、ハンドボールを素材に考えると、以下のような4つの運動教材が考えられる。

上記の4つの運動教材は、それぞれ内容的な視点を含み、方法的な視点で考えた際に、「少人数であることや、技能差・体格差が大きい」という複式学級の児童の実態を通して考えると、どの運動教材を設定するのか、さらに加工・改変できないかを吟味し、設定することで、子どもたちが目を輝かせながら、ボールゲーム系領域の授業を楽しむことにつながるものとする。

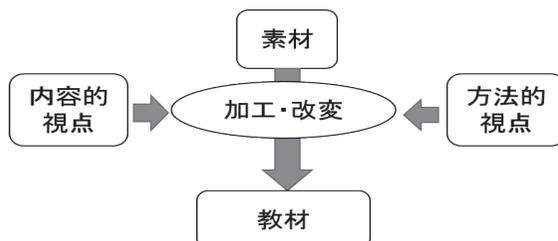
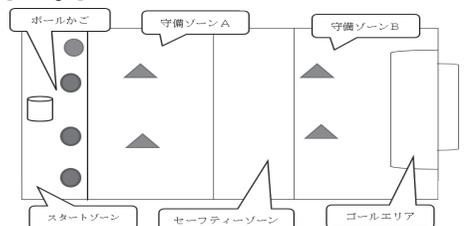


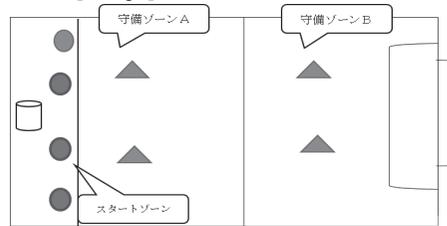
図1 教材づくりの基本的視点 岩田(2012)を一部改変

【教材①】・・・攻守交代型セーフティーゾーン有りグリッドハンドボール



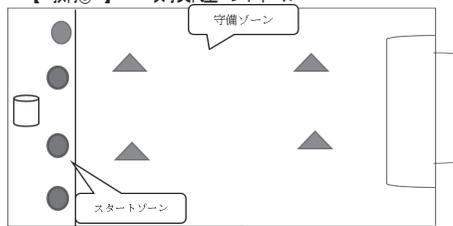
- 【ルール】
- 攻守交代型で時間内にスタートゾーンからパスをつないでゴールした数を競い合う。
  - スタートゾーンに全員が揃って攻撃スタート。
  - 守りは、A・Bゾーンに2人ずつ。グリッド内は4対2の数的に優位な状況になる。セーフティーゾーンで休める。
  - ドリブルなし。身体接触・ボールを奪う等なし。
  - ボールかごにボールをいくつか入れておき、何度も繰り返し攻撃できるようにする。

【教材②】・・・攻守交代型グリッドハンドボール



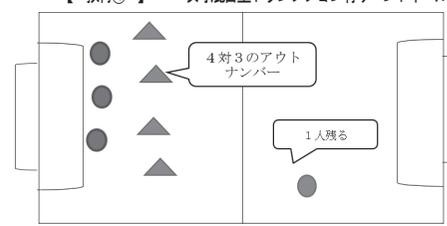
- 【ルール】
- 攻守交代型で時間内にスタートゾーンからパスをつないでゴールした数を競い合う。
  - スタートゾーンに全員が揃って攻撃スタート。
  - 守りは、A・Bゾーンに2人ずつ。グリッド内は4対2の数的に優位な状況になる。
  - ドリブルなし。身体接触・ボールを奪う等なし。
  - ※ ルールは、教材①と変わらないが、セーフティーゾーンが無いため、攻撃側が難しくなる。

【教材③】・・・攻守交代型ハンドボール



- 【ルール】
- 攻守交代型で時間内にスタートゾーンからパスをつないでゴールした数を競い合う。
  - スタートゾーンに全員が揃って攻撃スタート。
  - 守りは、守備ゾーンに3人入る。グリッド内は4対3の数的優位な状況になる。
  - ドリブルなし。身体接触・ボールを奪う等なし。
  - ※ ルールは、教材①・②と変わらないが、グリッドが無くなったため、4対3の数的な優位の状況が少し厳しくなる。

【教材④】・・・攻守混合型トランジション有りハンドボール



- 【ルール】
- 攻守混合型（トランジション：攻守の切り替え有り）で時間内コパスをつないでゴールした数を競い合う。
  - コート中央に全員が揃って攻撃スタート。
  - 守りは、守備ゾーンに3人入り、1人は相手コートに残るようにする。攻撃側は、4対3の数的優位な状況になる。
  - ドリブルなし。身体接触・ボールを奪う等なし。
  - ※ トランジションが有るため、攻守の切り替えが出てくるが、基本は、空いているスペースに走り込んで正確コパスをすることで攻撃を行うことは変わらない。

このように、種目を学習することを中心とする考え方から脱却し、型に共通する技能を、運動教材づくりを行いながら、身に付けさせていくことの重要性について述べてきた。さらに、次項では、これまでに述べてきた「指導内容の明確化」「運動教材の設定」の具体的な手順とその実際について述べることにする。

#### 4. 4 指導内容を明確にし、運動教材設定の工夫を図った複式体育科授業の実際

本項では、これまで述べてきた「指導内容の明確化」「運動教材の設定」を基に、実際にどのように授業づくりを進めると、成功裡に授業展開ができるのかについて、具体的な事例を提示しながら詳述したい。

下記単元（「ゴール型ゲーム；ハンドボールを基にしたゲーム」全9時間 対象；中学年）では、前項において、詳述した手順を活用し、指導内容（「技能」「態度」「思考・判断」）を明確にしたうえで、5つの段階の検討を経て、運動教材の設定（「攻守交代型グリッドハンドボール」）を進めたものである。このような手順を重ね、運動教材の設定をすることができるならば、「1 本案」において、現況では、「2 年間同じ内容を学習することになる」という課題の解決に繋がるものと考えられる

単 元 ゴール型ゲーム (ハンドボールを基にしたゲーム) [全9時間]		
指導内容	3 年	4 年
態 度	① ゴール型ゲームの学習に進んで取り組むことができる。 ② 用具の準備や片付けを、友達と一緒にする。 ③ 運動の順番やきまりを守り、友達と仲良くゲームする。 ④ 危険物が無いか、ゲームする場が十分あるかなどの場の安全に気を付ける。	
思考・判断	① ゴール型ゲームの行い方を知る。 ② ゲームや練習をする時の規則などを選ぶ。 ③ ゴール型ゲームの特徴に合った攻め方を知る。	① ゲームや練習をする時の規則などを選ぶ。 ② ゴール型ゲームの特徴に合った攻め方の簡単な作戦を立てることができる。
技 能	① 空いている場所に動く。 ② ボールを持ったときにゴールに体を向ける。 ③ 味方にボールを手渡したり、パスを出したりする。	① 空いている場所に素早く動く。 ② 向かってくるボールが取れる位置に移動する。 ③ ボール保持者と自分の間に守備者がいないよう位置に移動する。
<b>【運動教材の魅力】</b> <input type="checkbox"/> ボールをゴール地点まで運ばせる・運ばせないの攻防 <input type="checkbox"/> シュートを打たせる・打たせないの攻防		
内容的な視点		方法的な視点
<b>【中核となる学習課題】</b> <input type="checkbox"/> ボールをゴール地点まで運ぶためのパスをもらう位置 <input type="checkbox"/> シュートを打つためにパスをもらう位置取り		<b>【児童の実態】</b> <input type="checkbox"/> ボール運動系が好きな児童が多い。 <input type="checkbox"/> 3年生の女子の中にボールを捕る・投げる技能が低い児童が見られる。
<b>【教材②】・・・攻守交代型グリッドハンドボール</b>		
		<b>【ルール】</b> ○ 攻守交代型で時間内にスタートゾーンからパスをつないでゴールした数を競い合う。 ○ スタートゾーンに全員が揃って攻撃スタート。 ○ 守りは、A・Bゾーンに2人ずつ。グリッド内は4対2の数的に優位な状況になる。 ○ ドリブルなし。身体接触・ボールを奪う等なし。 ※ ルールは、教材①と変わらないが、セーフティーゾーンが無いため、攻撃側が難しくなる。
<b>【教材設定までの手順】</b> ① 既習の内容や発展する内容を考えながら、学習指導要領解説の内容を基に、3・4年生の指導内容を明確にする。 ② 素材のハンドボールのもつ魅力を考える。 ③ 内容的な視点：この教材に身に付けさせたい内容（特に中核となる学習課題）を身に付けることができるのか吟味する。 ④ 方法的な視点：特に児童の実態を考慮して、指導内容を身に付けながら運動教材の魅力を味わうことができるのか吟味する。 ⑤ これらの過程を踏まえて、「攻守交代型グリッドハンドボール」を設定する。		

次頁以降は、これらの手順を踏まえて作成した「学習指導案」及びその実践についての概要である。

## 複式第3・4学年 体育科学習指導案 同内容・異程度

Ⅱ組 3年 男子8名 女子8名  
4年 男子8名 女子8名 計16名  
指導者

### 1 単元 ゴール型ゲーム（ハンドボールを基にしたゲーム）

#### 2 単元について

##### (1) 単元の位置とねらい

###### （第3学年）

この期の子どもたちは、これまでの「ルールを工夫したシュートゲーム」の学習を通して、みんなが楽しめるルールを工夫してきている。また、自分がシュートを打つための位置取りを考えたり、投げる、捕るといった動きを高めたりして、シュートをして得点を競い合いながら攻防するゲームの楽しさを味わってきている。そして、「シュートをたくさん決めたい」「攻め方を工夫し協力して勝ちたい」等の願いをもっている。

そこで、ここでは、みんながゲームを楽しむために、全員がシュートを決めることができるようなルールを工夫したり、チームの特徴に応じた攻め方を選択したりできるようにする。また、空いている場所に動いきながら、パスでボールを運んだり、シュートをしたりする技能を高めながら、友達と協力して攻防し得点を競い合うゴール型ゲームの楽しさを味わい、深めさせようとするものである。

この学習は、みんなが楽しめるようにルールを工夫し、味方や相手の動きを見て空いている位置に動いたり、フリーの味方にパスを出したりする技能を高めながら、勝敗を競い合う楽しさ味わう「ぼくたちのフロアフット」の学習へと発展する。

##### (2) 指導の基本的な立場

「ゴール型」の楽しさは、ボールや自分を目的地へ移動させようとする攻撃側と、それを阻もうとする守備側とが競い合うところにある。また、チームで連携して攻め方や守り方を工夫することで楽しさが深まっていく。

第3学年にとっての「ゴール型ゲーム（ハンドボールを基にしたゲーム）」は、空いている場所に動いて、パスを受けたり、フリーの味方にパスを出したりしながらボールをゴール前まで運びシュートする動きを身に付けながら得点を競い合う学習である。そして、課題を解決するために、ルールを工夫したり、攻め方を選択したりしながら友達と協力して運動に取り組んでいくことで、全員がゴール型の学習を楽しめるようになる。

このゴール型の楽しさを3年生と4年生が一緒に学ぶ中で味わわせるためには、攻撃側が優位に展開できるように、コートを区切ったり、4対2の状況をつくったりする。また、何度も攻撃することができるように、攻守交代型の教材を設定する。このような教材を設定することで、「チームワークを大切にすること」「パスをつないでゴール前まで進むこと」「ゴールまでパスをつないでシュートすること」「みんなが楽しめるルール工夫すること」などの課題をつかませる。そして、チームの課題を解決していく過程で、ルールを選択・工夫させたり、必要に応じてタスクゲームを設定したりしていく。さらに、課題解決の過程を振り返らせながら、課題意識を連続発展させたり、価値ある姿を称賛したりしていく。

そこで、学習の展開としては、試しのゲームを行わせ、「チームで協力して、ボールをパスでつないで、シュートを決めたい」という願いをもたせ、チームワークを大切にすることやルールの工夫を行っていくこと、動きを高めていくことなどの課題を明確にし、学習の見通しをもたせる。

まず、ルールの工夫を行い、ゲームを行うことで、みんなが楽しめるゲームをつくっていくと同時にマナーやチームワークの大切さも確認していく。次に、ゴール前までのパスのつなぎ方とゴール前でのシュートにつながるパスのつなぎ方について課題解決を図る。その際、客観的に動きを把握することができるように、他者評価を取り入れていく。また、課題に応じたタスクゲームを設定していく。さらに、子どもたちの攻め

###### （第4学年）

この期の子どもたちは、これまでの「ルールを工夫したセストボール」の学習を通して、全員がシュートして楽しめるルールの工夫をしてきている。また、空いている場所に動いてパスを受けたり、パスを出したりしながらボールを運び、シュートをして得点を競い合いながら攻防するゲームの楽しさを味わってきている。そして、「パスを回してシュートをたくさん決めたい」「攻め方を工夫し協力して勝ちたい」等の願いをもっている。

そこで、ここでは、みんながゲームを楽しむために、全員がシュートを決めることができるようなルールやチームの特徴に応じた攻め方を工夫できるようにする。また、味方や相手の動きを見てパスでボールを運び、シュートが打てる場所でパスを受けて、シュートする技能を高めながら、友達と協力して攻防し得点を競い合うゴール型ゲームの楽しさを味わい、深めさせようとするものである。

この学習は、みんなが楽しめるようにルールを工夫し、味方や相手の動きを見てパスがもらえる位置に素早く動いたり、フリーの味方にパスを出したりする技能を高めながら、勝敗を競い合う楽しさ味わう「ぼくたちのフロアフット」の学習へと発展する。

第4学年にとっての「ゴール型ゲーム（ハンドボールを基にしたゲーム）」は、ボール保持者と守備者が重ならない場所に素早く動いて、パスを受けたり、フリーの味方にパスを出したりしながらボールをゴール前まで運びシュートする動きを身に付けながら得点を競い合う学習である。そして、課題を解決するために、ルールや攻め方を工夫しながら友達と協力して運動に取り組んでいくことで、全員がゴール型の学習を楽しめるようになる。

方を類型化し、攻め方としてまとめ、自分のチームに合った攻め方を選択したり、工夫したりできるようにする。最後に、ハンドボール大会を行い、動きの高まりやチームワークの深まりを振り返らせ、チームで協力しながら課題を解決に取り組んできた過程を価値付ける。

これらの学習を通して、子どもたちは、クラス全員がゲームの楽しさを味わうためにルールや攻め方を工夫することの大切さ、動きの課題を解決するために、友達と協力して、動き方を伝え合い、教え合いながら練習する大切さに気づき、攻防の中で得点を競い合っていくゴール型ゲームの楽しさや価値を味わい、ボール運動やその他の運動とのかかわりを一層深めて挑戦し続けることができる。

### 3 目 標

- (1) 「みんなでパスをつないでシュートを決めたい。」などの願いをもって、友達と協力し合い、安全に気を付けて、粘り強く運動に挑戦することができるようにする。
- (2) 自分やチームの動きの課題に合った練習を、動く感覚をつかむ観点を基に工夫したり、ゲームの規則の工夫や攻め方の作戦を立てたりすることができる。
- (3) パスを出したい方向に体を向けてパスを出したり、ボール保持者と自分のとの間に守備者がいないように移動したりすることができる。

### 4 指導計画

単 元	1	2	3・4・5	6・7	8・9
過 程	つかむ・見通す	挑戦する・工夫する			生かす
課題の追究過程	<p>試しのゲームをして、みんなが楽しめるハンドボールの学習計画を立てよう。</p> <p>パスがつながらず、シュートも打てなかった。</p> <p>ルールの工夫や動き方の学習が必要になってくるぞ。</p>	<p>みんなが楽しめるルールをつくらう。</p> <p>【進め方】</p> <p>準備運動 → ドリルゲーム → ゲームI タスクゲーム → 話し合い 作戦 → ゲームII メインゲーム → 整理運動 振り返り</p> <p>「ルールの工夫」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 全員得点ボーナス</li> <li>○ 初得点4点</li> <li>○ 得点者×得点</li> <li>○ フリーゾーン</li> </ul>	<p>どこでパスをもらおうとゴール前まで進めるのだろう。</p> <p>どこでパスをもらおうとシュートできるのだろう。</p> <p>チームに合った攻め方を選んでゲームに生かそう。</p> <p>「タスクゲーム」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○3対1バドゲーム</li> <li>○4対2ハーフコートゲーム</li> </ul> <p>「観点」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○位置・方向</li> </ul> <p>「働きかけ」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○言葉掛け</li> <li>○動き方ボード</li> <li>○ICT</li> <li>○他者評価</li> </ul> <p>空いている場所や相手と重ならない位置に移動してパスをもらおう。</p>	<p>「攻め方の選択・工夫」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ スペースをつくるおとり作戦</li> <li>○ クロスで走る作戦</li> <li>○ 逆サイドにパス作戦</li> <li>○ ロングシュート作戦</li> <li>□ チームで自分たちに合った作戦を選択</li> </ul> <p>【進め方】 練習→ゲーム→振り返り</p>	<p>ハンドボール大会をしよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ トーナメント戦</li> <li>○ 学習のまとめ</li> <li>○ 価値付ける内容</li> <li>○ 協力</li> <li>○ ルール・作戦の工夫</li> <li>○ 観点のよさ</li> </ul> <p>生活の中で進んで運動に親しんでいく姿</p>
	技			①	②
評 価		①			②
		④	③	②	①

※ 評価欄の番号は、前述の指導内容と同じ

### 5 本 時 (4/9)

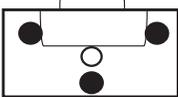
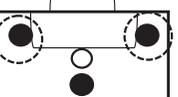
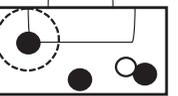
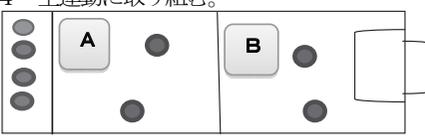
#### (1) 目 標

「パスをつないでゴール前まで進みたい」「シュートを決めたい」などの願いをもち、ゴール前でシュートを打つための位置取りを考えることができる。  
シュートを打つための位置取りを見つけて、そこでパスをもらいシュートすることができる。

#### (2) 本時の展開に当たって

シュートを打つための位置取りを気付かせるために、敵がいない場所を見付ける活動を設定する。そして、見付けた場所に走り込んでシュートを打つ動きを身に付けさせるための3対1のタスクゲームを位置付ける。

(3) 実 際

過程	主な学習活動	時間	教師の具体的な働きかけ
つかむ・見通す ↓ 挑戦する・工夫する ↓ 生かす	1 準備運動をする。 ○ 附属体操・ ○ ドリルゲーム	(分) ↑ 8 ↓	○ ボールを投げたり、捕ったりする際に、可動範囲を広げておきたい肩関節や股関節をほぐしたり、体力を高めたりするために、附属体操を行わせる。
	2 本時のめあてについて話し合う。 ゴール前までボールを運ぶようになったよ、でも、ゴール前でシュートにつながらないことがあるよ。 ゴール前でシュートを打つには、どこでボールをもらえばよいのだろう。	↑ 5 ↓	○ ボール操作の技能を高めるために、パス・シュートゲームを行わせる。
	3 シュートを打つための位置取りについて考える。 〔練習1〕  〔話し合い〕   〔練習2〕 3対1のゲーム	↑ 17 ↓	○ シュートを打つための位置取りに気付かせるために、攻撃側が激的に有利な3対1のゲームを行わせる。その際、シュートが打てた子どもに「どうしてシュートが打てたのかな。」と問うことで、位置取りについて考えさせる。
	4 主運動に取り組む。  各ゾーンで4対2のゲームを行う。Aゾーンを突破して、Bゾーンに入ってシュートを打つ。攻守交代制、5分間で交代する。時間内の得点を競い合う。 接触・ボールを奪う・歩くことはできない。	↑ 15 ↓	○ シュートが打てる位置でボールをもらってシュートするために、「両サイドに走り込もう。」「逆サイドにパスを出そう。」などの言葉掛けを行う。
	5 整理運動をする。	↑ 5 ↓	○ 本時の伸びや課題を明確にするために、振り返りをノートに記入させ、発表させる。また、チームの伸びを称賛し、その取り組み方を価値付ける。
	6 本時の学習を振り返り、次時の学習への意欲を高める。 両サイドや逆サイドに走り込んでパスをもらおうと、シュートすることができる。		

6 成果及び課題

- 指導内容を明確にして、運動教材を設定することで、3・4年生の指導内容を身に付けさせることに適した運動教材で3・4年生が発達の段階に応じながら運動の魅力を味わう姿が見られた。
- 今後は、3・4年生が指導内容を身に付けていく過程での形成的な評価の在り方を工夫しながら、働きかけ掛けを具体化していくことで、指導内容をより確実に身に付けさせていく必要がある。

## 5 まとめと今後の課題

本論では、鹿兒島県における教育現場特有の課題である複式学級の指導、特に体育学習に焦点化をして、実践現場において、教師らは、どのような課題をもっているのかをアンケート調査から明らかにし、その課題解決を目指すための手立ての1つとして、「各学年の指導内容の明確化」「指導内容を身につけさせる運動教材の設定」を主柱とした授業づくりの手順とその具体的な実践例の紹介を行った。

アンケート調査から明らかになった事項は、複式学級では、子どもの〈実態の幅〉が広く、とりわけ体育指導では、その困難の度合いが他の教科を凌駕するのではないかと考えられることである。他の教科では、各学年で学習すべき内容が規定されているため、学年が入れ替わり、学習が展開されることは、一般的には考えにくいことである。そのため、指導の方法論上の工夫として、いわゆる「ずらし」「わたり」を活用しながら、授業を成功裡に展開することを旨とすることが可能となる。一方、小学校体育科では、前述した通り、小・中・高学年の2年間のまとまりで内容が提示されている。複式学級を担当する教師らは、この2年間のまとまりで示されている内容を、眼前の子どもの実態に照合し、精緻に整理をすることが、すなわち、学習内容を的確に設定し、その内容に合致した運動教材の設定を行うことが、授業づくりにおいては不可避な作業であることが明確であるといえ、この作業が欠落してしまうと、子どもたちが「意味のない身体活動」に取り組む体育授業を創出してしまうことになる。本論において紹介した指導案事例などは、複式学級を担当する教師らにとって、今後の授業づくりにおいては、有用な指針になるものと考えられる。数多くの教師らに、それらが効果的に活用され、また改善されることを通じて、複式学級の体育授業実践の取り組みが実り多いものになることができれば幸いである。

## 付記

本報告は、鹿兒島大学教育学部附属小学校平成25～28年度研究紀要で発表した体育科の研究内容に基づき、複式教育において研究をさらに発展させ、その研究成果をまとめたものである。

## 謝辞

本報告は、鹿兒島県内の複式学級を有する小学校の先生方に多大なご支援をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

## 引用・参考文献

岩田靖 (2012) 体育の教材を創る. 大修館書店

鹿兒島大学教育学部附属小学校編 (2013) 個の確立を目指す授業の創造Ⅰ, 平成25年度研究公開冊子

鹿兒島大学教育学部附属小学校編 (2014) 個の確立を目指す授業の創造Ⅱ, 平成26年度研究公開冊子

鹿兒島大学教育学部附属小学校編 (2015) 個の確立を目指す授業の創造Ⅲ, 平成27年度研究公開冊子

鹿兒島大学教育学部附属小学校編 (2016) 個の確立を目指す授業の創造Ⅳ, 平成28年度研究公開冊子

文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領解説体育編, 東洋館出版社

高橋修一ら (2015) 特集: 小規模校の体育授業を創る, 体育科教育, 63 (2)

高橋健夫・立木正・岡出美則・鈴木聡編著 (2010) 新しいボールゲームの授業づくり, 体育科教育別冊, 58 (3)